



# 夏椿

稲辺美津句集

夏を告げ候の口  
夏は六ヶ月  
一石に六ヶ月

光風社

たつぷりと朝の気含む夏椿

冴返る遠嶺に生れし光かな

人待ちて佇む一樹花陽炎

黒羽の雨ゆたかなり坐禅草

熊笹の池に揺らすや蝌蚪曇り

夕風の苑になごみの錨草

櫻葉降る湧水の音高し

梅東風や壁に掛けたる父の筆

雁帰る母の形見の袖衣

父逝きてよりの窓辺や牡丹の芽

菜の花や大河に零る鳥の声

風の詩乗せて静かに花筏

昨日より今日より明日の白牡丹

芍薬の揃へば雨の静寂かな

瑠璃鷓来て一景を光らせり

父の世を手繰りよすかに田植歌

振り出しに戻る詩ごころ夏の月

夏濤のゆるぎなき声父想ふ

藍浴衣さらりと齡隠しけり

水音に突き当たりたる流れ星

星 飛 ん で 濤 音 の み の 父 の 里

盆 の 月 ほ し い と 走 り 出 す 児 か な

身 の 反 り を 月 に 浮 か せ て 風 の 盆

あ か と き の 胡 弓 に 揺 ら ぐ 酔 芙 蓉

潜 り 来 る 切 符 の 反 り や 秋 の 声

稲架包むおほらかな日の時間かな

この森の静寂好みて小鳥来る

真つ白に乾く刈田の眠り初む

新涼の小袖に触れて過客かな

白桔梗静かに賜ふ茶の心

鳥兜遙かな小舟動かざる

藁ぼつち峡を小さく乾かしぬ

椿の実はせて微風を呼びにけり

この山の奥が生地と夕時雨

瞬きをすれば増えくる浮寝鳥

困炉裏の火とるとる昔思ふかな

枯菊を焚いて炎のまだ若き

冬渚小貝を軽く裏返す

裸木となりてあらたに踏む一步

一刻の心無にせり雪景色

寒の雨だまつて見つむ渡し舟

端居して星の歩みの時間かな

葭切や青き流れに目を凝らす

萱刈女声掛け寄れば媪かな

箒目に客を装うて来る枯葉

沖に出で冬の星座を数へけり

初東風の沢音背負ふ比翼塚

あたらしき庫裡の家紋や梅一輪

冴返る遠嶺に生れし光かな

いつも陽の溢るる径や露の臺

## 著者略歴

稲辺 美津（いなべ みつ）

昭和 5 年3月7日 埼玉県川越市に生まれる

昭和60年8月 小澤克己に師事

平成 4 年5月 「遠嶺」入会

平成 5 年1月 「遠嶺」同人

平成 7 年6月 「遠嶺」編集部員

平成11年4月 「遠嶺」高嶺集 同人

句集

夏なつ椿つばき

現代俳句10人集 第 期

発行 平成十二年七月二十五日

著者 稲辺 美津

発行人 小島 哲夫

発行所 北 冥 社

B 6 変形 二句組

PDF 製作 俳誌のサロン